

先日、徳島県鳴門市にある大塚国際美術館に行ってきました。2015年に初めて訪館して以来二回目の名画鑑賞の時でした。前回は日帰りの日程であったために、帰りのフェリーの時刻を気にしながらの鑑賞でした。そこで今回は、前日に美術館近くのホテルに一泊して、翌日の開館時刻に合わせて入館しました。そのうえ今回は、多くの名画の中でもキリスト教に関係のある絵画に焦点を絞って鑑賞することにしました。多くの画家が聖書の記述に刺激を受けて、それぞれの信仰を絵によって表現していることを興味深く鑑賞することができました。時代や地域によって、画家にもそれぞれの信仰の表現に違いがあることを実感しました。

やはり圧巻は、ミケランジェロによるシスティーナ礼拝堂の天井画と壁画でした。展示されている作品は、すべて原寸大ということですから、その大きさと画家の労苦に改めて驚愕しました。天井画は旧約聖書「創世記」の天地創造の記事を描いています。また正面の壁画は、新約聖書「黙示録」による最後の審判の様子を描いています。いま画家と同じ聖書を読んでいる者として、聖書の記事からあれほどの着想を得て、絵に現わしていることに大きな感動を覚えました。ただ画家の表現には、私たちの信仰と聖書理解に違いがあることは、画家の生きた時代の影響が出ているように思いました。

もう一つレオナルド・ダ・ヴィンチの有名な「最後の晩餐」の大きさにも驚きました。この絵は、キリストの弟子たちの一瞬の驚き、かつ当惑している様子が描かれています。食事の席でキリストが突然「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」と言われたことを聞いて、十二人の弟子全員が本心を言い当てられたことでうろたえました。彼らはキリストに対して、次々に「まさか私ではないでしょう。」と言い始めたと聖書は記しています。キリストの弟子たちも画家もそして私たちも、お互いに「わが身可愛さ」から来る、自己保身と責任転嫁を繰り返していることに気付かされました。この美術館の展示作品は、すべて陶板の複製画ですが、原寸大でもあり、画家の意図を充分読み取ることができます。そしてそれ以上に、これらの作品に刺激されて、皆さんもぜひ「聖書」そのものを読んでください。そして私だったら、聖書の一場面をどんな絵に表すことができるかなどを考えるのも面白いことではないでしょうか。